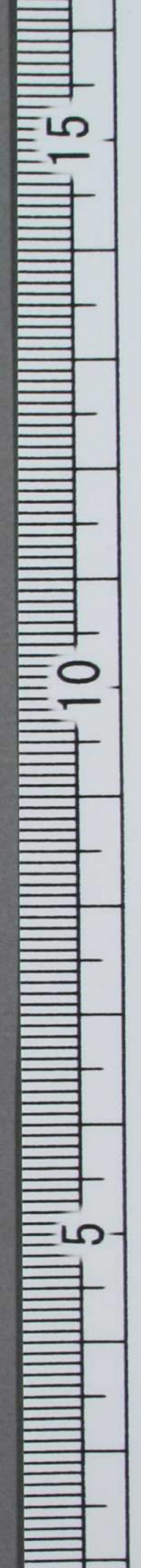


洋和
手
品
の
種

79
4273





廣持館



和洋手紙の種目次

第一	支字をくくでん	第十四	西洋玉のころりあて
第二	あんむすびのでん	第十五	風呂き酒をつむでん
第三	むじんやとりの法	第十六	色白くあるでん
第四	水は木目さうかき傳	第十七	てんぐ鏡のでん
第五	ざき三月を	第十八	こよりそ徳利をつる傳
第六	白紙へ大をうらひは支字を	第十九	あぢうつらぎのでん
第七	せと物に切のでん	第二十	人をねおけせのでん
第八	あぐをとめ <small>の法</small>	第二十一	ざかぬい出をでん
第九	瓶は酒をかきせの傳	第二十二	化物らうるのでん
第十	化物あんどろい <small>のでん</small>	第二十三	くろやい一時のでん
第十一	あつりて人を捧でん	第二十四	ツツア水ぬき
第十二	男女和合の <small>でん</small>	第二十五	紙つて鏡をつらるでん
第十三	アラソコの内 <small>は玉子</small>	第二十六	扇墨の <small>のでん</small>

通計 二十六傳



うやのこ
ろろあんを
とろあんを
たをこしませ
てよーそのけむ
をぐよふき

たをこのけむを
とろろをくく傳

あ
くねが
とろろあつら
まり

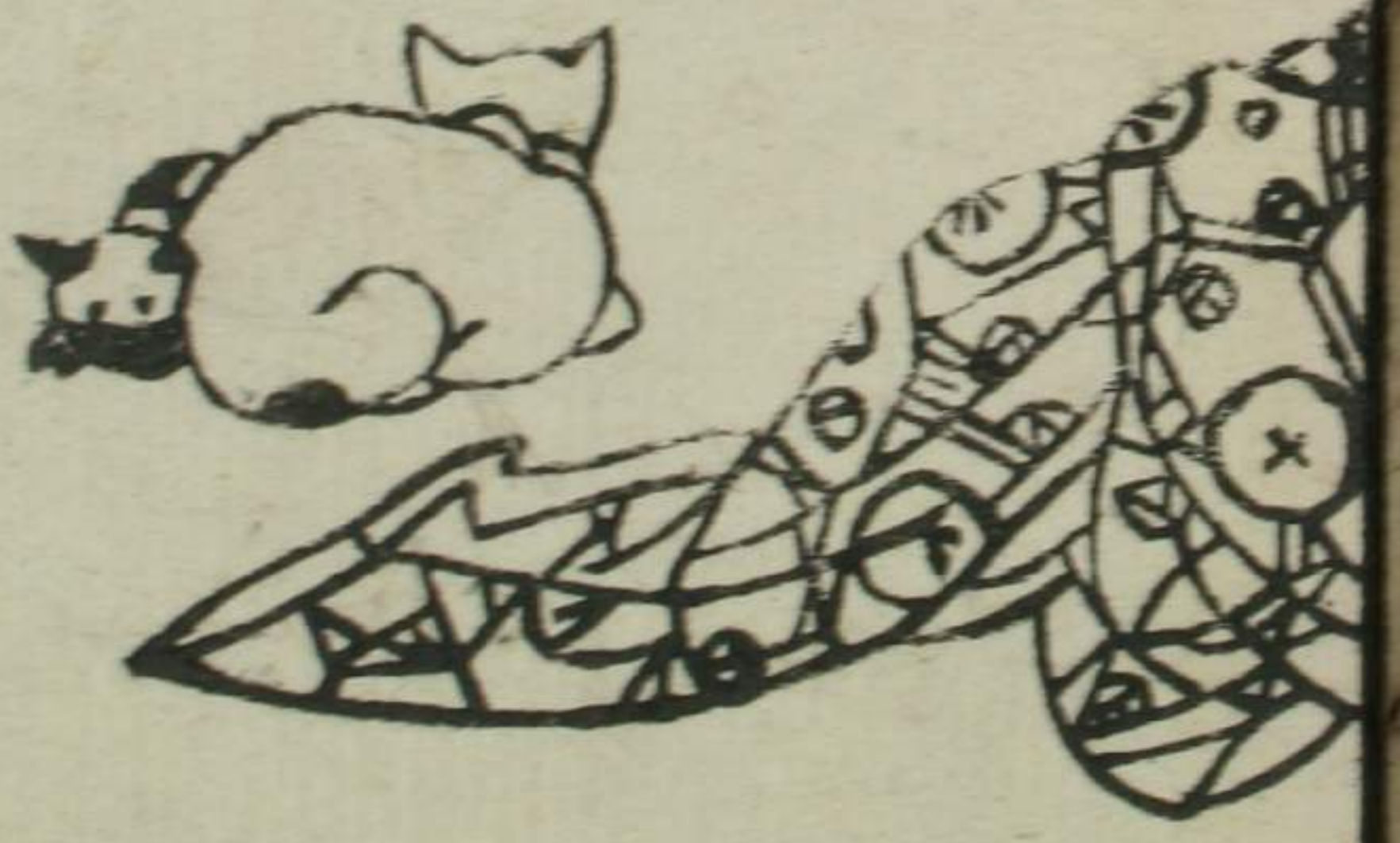




あんむきび

のせん

日がたやあしあつきの
 ちかおのちかおのちか
 ちかおのちかおのちか
 つたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつた



むしんまや
おまの法

☆

このまの
おまを

おまを
おまを

おまを

おまを

おまを

おまを

おまを



おまを
おまを
おまを

おまを
おまを

おまを
おまを

おまを
おまを

おまを
おまを

おまを
おまを



能^ち敷^しと^らん^まお^のせ^又一^枚を^巻の^ぶく^母
ま^を持^ちて^写す^附本^の燃^さす^をさ
し^まみ^上の^釜を^とろ^く居^さら
せ^るま^る二^日月^の由^一や^うふ^見る^事
あり

白紙へ火をうつし

文字を焼^かつ^る紙^でん
火^の衣^おの^りし^葉ら^る灰^をとり
み^まと^らん^まお^のせ^又一^枚を^巻の^ぶく^母
候^ふり^紙乾^し巻^のこ^とく^らん^まお^のせ^又
し^まみ^上の^釜を^とろ^く居^さら
せ^るま^る二^日月^の由^一や^うふ^見る^事
あり

くさくさくさくさく

ひら 簾ぐるるるり

うたご ちるるるるるる

画も涙の如く

ひらりりりりりり

筆法の放れ

一ののののののの

たののの

のののののの

のののののの

のののののの

のののののの

のののののの

のののののの

のののののの

のののののの



あらし
とめの法



一十
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

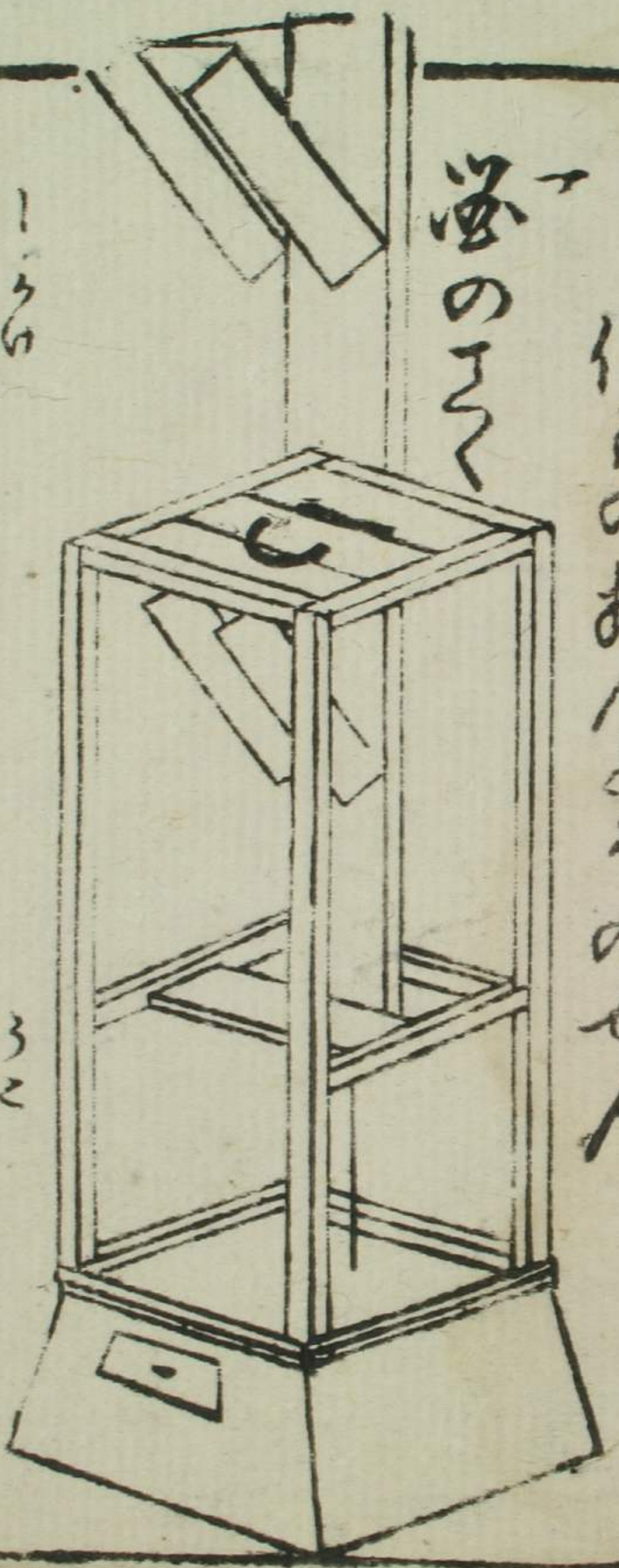
あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち



化のあつちのあつち

あつちのあつち



あつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつち

あつち

鏡かがみをくしと人を棒ぼうにひひくくふふははるる傳つたえ

夢ゆめのぶくあまあまと

肩かたへ突つくらくらむ

ひぢとほほのひ

くみへ三尺さんせきゆゆららと

困こむむるる容よう易いみみ救きうととららるるははららいい



男女おとこ比ひびびののででん

十月じゅうがつととつつのの冬ふゆのの目めおおききあありりししゆゆをを
ままりりののゆゆののまま
ままふふ男おとこ女めののままと
ギギーーととううままいいししくくんん
ふふののままををいいぬぬのの
ととこころろへへままををいいしし
ここののままををいいししくくんん
ががひひららるるべべととららん



ままこれなる

星本号成フラツコへ玉子の汁と書き

こむ ともぬ いちこ

ことり

込惣ち一羽の小鳥とある徳利の内

こむ 一羽

ひ

種仕織へんごいませんと打たすまじして

こ

こり やれく

見せまより由子を割つた入上より口を

それ

えんぶ

一

まるりのまより見物み知れぬやふ小

とり

くあぶち

鳥を右の手の内へあらし候挺をた

い

さけ

と

づえ老のふフラソコを提出せ徳利の横

うち

たり

さ

ほく打徳利ニッ小ぬて放りくられた

ことり

せ

の小鳥を放りあり考より入るくらむ

い

利の内より出ーエくみん申るあり

せのよう

西洋玉のうだあぐ

さ

えんぶ

一馬と白のニツの玉をくらへ見物

みろく一圓を眠り

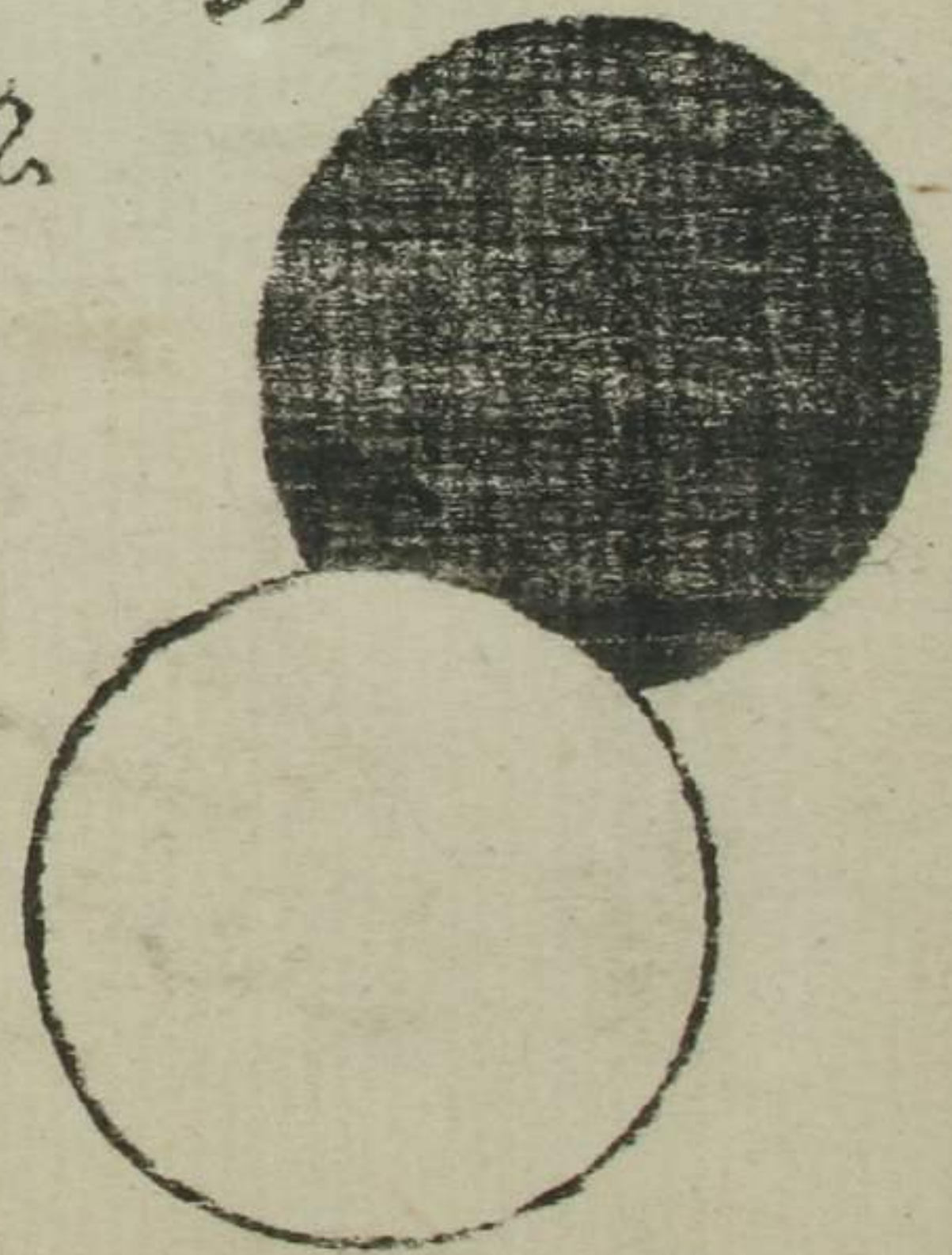
一ツの玉と交え

黒く白くとかがきあ

てらあり 是ハ香と臭也

あつみあふげ 目方の重くと軽くと

造りその軽重とをうりてあつみのつ



ふろく一丸をきを

つむせん

らんやぐらぬを

まりのりまを

まろくをんを

まこしーやれ

あろくたひま

さけをつむ

つむらぬ

つむらぬ



スズキヤシキ
カネノシ

八月十五の夜

くちあひの夜

きりとの

ついで

おのち

いふこと

いふこと

くちあひの夜



いふこと

いふこと

いふこと

いふこと

いふこと

いふこと

いふこと

いふこと

いふこと

いふこと



ふふ燃付あり滑く燃くく為気味うまきこ
 悪きもの中人せついでん雪隠のあんどう又ハ危あひ
 の燃は終るふ用ゆると火ハ人々をとり

一真とあるべし

時書ハ時ハ

教ハ火を點出る傳

その化のろうそくと目ト仕方あり

燭燭の先を息こがし七の先ハ蒸焼の燃せん

香かういろうせうのろうそくと一玉たまをう

ル燃香せんかうハ火をうじ

を並ありこの

燃香せんかうのろうそく



方まがの火ひ鉢はちのまがの内うちへ入いれ灰あしを落おくう
 けそのうへあそ火ひを替かへ方まがのよく通とり
 一ひと程ほどを引ひ出だせ余あり焼やこす
 いろぬゆへ心こころ付つけべー火ひをうらじても烟けむり
 去いる火ひの光ひかりりえぬめり之この袋ふくろのどろこ
 去いらぬぎ火ひ袋ふくろも去いる袋ふくろ一ひと

コップのぬめり

コップへぬめり多おほくと入いるの上うへに居ま

ぬめり  のどろきをすすりぬ

ぬめり多おほくとぬめり多おほくの裏うらにコップの口くちを

ぬめり多おほくのぬめり多おほく板いたを洗あらい付つけをコップへ

ぬめり多おほく板いたと共ともぬコップをぬめりの所ところへ

ふせーツの風呂敷を座の上におくコップ
 の板を敷して風呂敷の上におく



風呂敷に三方盆のよう、引立てながら
 覧のやうにコップを風呂敷におく
 ひろがぐちのふせのこップ持風呂敷
 此のこップとまのうへにおくコップの
 へ蓋がしてある板を敷いておく
 の板を敷いておく

紙を鍋を

つら

せん



西の内へこんぬゆく

玉を煮た乾かしは角子折りちゆ
るありのちゆせんんの序みどりの
湯豆封をさくくく或つゆのを
あふらふると目先らつておる—
あきこのあつたあふらふらふらふら
や

石田の傳

石田の傳
石田の傳
石田の傳
石田の傳
石田の傳
石田の傳
石田の傳

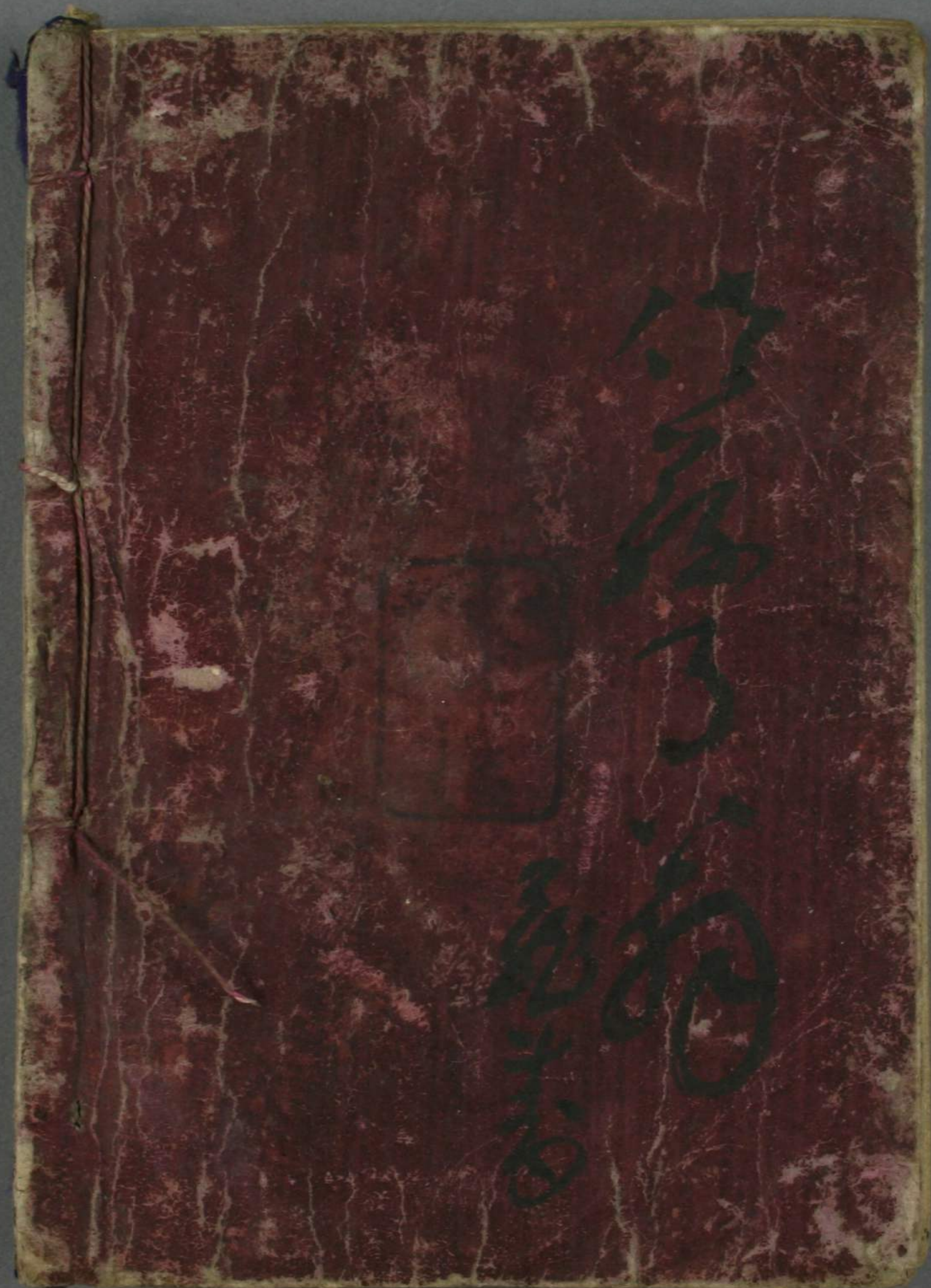


明治十七年七月九日御届

同
編輯兼
出版人
年
石田の傳
石田の傳
石田の傳
石田の傳
石田の傳
石田の傳
石田の傳

大 賣 捌
丸屋鉄二郎
辻岡文助
大倉孫兵衛

東京日本橋區
小網町二丁目



空齋子
卷一

